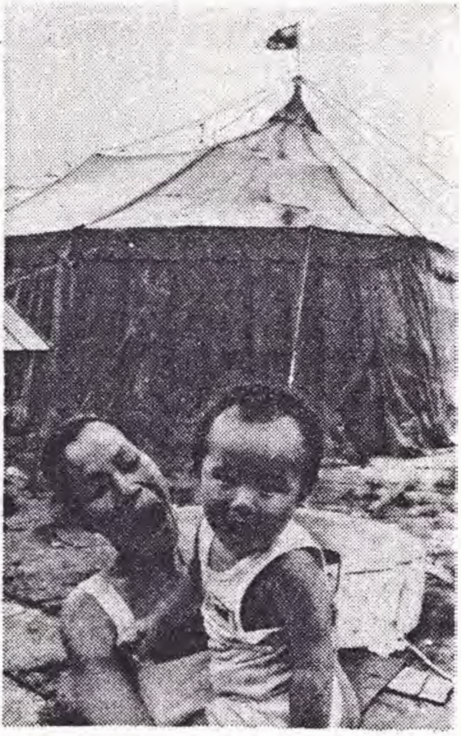
書評　中嶋嶺雄著『新冷戦の時代』-リアルに現状分析　『中国新聞』1980年12月21日

サーカスの時間

本橋成一著



「長野／飯田市／関根サーカス／1979年8月」
（同書から）

巻末のあとがきに、一つのエピソードが紹介されている。それは著者が五十四年の夏、長野県飯田市で興行中のサーカス団を取材したときのこと。見物客の若い母親がだだをこねる四、五歳の娘に「サーカスに置いていきますよ」と、〝脅し文句〟を言っていたというのだ。

暗いサーカスのイメージは、まだ一部に残っているようだ。が、著者がこの五年間、さまざまなサーカス団を全国各地の興行先に訪ね、団員の生活を約百二十枚の写真にまとめた本書には、六大サーカスが競うという「新しいサーカスの時代」にふさわしい明るい表情があふれている。

本書には曲芸のシーンは、あまりない。幕開けから終演までの主に〝舞台裏〟を追ったものだ。撮影場所も時間も異なる写真を編集してサーカスの一日を再現した構成も見事である。

俳優小沢昭一氏とサーカス団員の対談も収めている。

（筑摩書房・三二〇〇円）

リアルに現状分析

新冷戦の時代

中嶋嶺雄著

八〇年代はいかなる世界なのか、これは現在、国際関係に関心を抱く者にとってとりわけ大きな課題となっている。いうまでもなく、双極から多極化へと大きく変貌（ぼう）した戦後の国際政治のわく組みのなかで、七〇年代末に生じた一連の国際的事件、ベトナムのカンボジア進攻、中国の対ベトナム「制裁」戦争、ソ連のアフガニスタン進攻は新たな局面を現出させたし、またソ連の軍事力の増大とその世界的展開に対して米中日の〝同盟〟が指摘されるにまで至っているからである。

このような状況のもとで、第二次冷戦とか新しい冷戦という解釈が出されるようにもなり、これについては議論のあるところだが、著者は時代状況をつとに「生ぬるい戦争Cool War」を規定しており、この立場から本書のタイトルが直截（ちょくせつ）に示すように「新冷戦の時代」として、国際政治の現段階をリアルに分析している。

著者は「本質的な冷戦構造の解体であるどころか……よりグローバルな冷戦への幕明けであったのではなかろうか」と自問し、まずはじめに戦後ほぼ十年ごとの節目における転換の様相を剔出（てきしゅつ）してのち、日本に密接な関係をもつ中国をはじめソ連、米国の対外姿勢、政策をそれぞれの問題のなかで相互関連させながら分析、批判し、終わりに「平和のための地政学」として国際関係研究のすすめと提言、さらに「日本の選択」として日本の対外政策上の提言を行っている。

本書は著者のこれまでの研究論文をベースとしながら、いわば一般向けに平易に、また包括的に叙述されており、著者の考えを知るうえで適当であろう。

本書で扱われている問題は多岐にわたるが、評者の関心をもった論点を二、三挙げると、米国、日本でも一時盛んにいわれた対ソ政策上の〝チャイナ・カード〟というのは、いまや昔話であり、中国が〝ソ連カード〟を現在はもっているのであって、中ソ対立という「新しい神話」の陥穽（かんせい）に陥らぬよう警告し、中国の現在の状況からすれば中ソ和解の可能性をも見通しておかなければならないと指摘していること、また、米ソ両大国の錯誤は中国の虚と実を見極めていないことにあるという指摘などである。

現代世界に関心を持つ者に、刺激を与えさせる本である。

（TBSブリタニカ・一〇〇〇円）

文庫

▽中公文庫　谷崎潤一郎著「月と狂言師」（三二〇円、一月十日刊＝以下同じ）、尾崎一雄著「閑な老人」（三八〇円）、富岡多恵子著「女子供の反乱」（三二〇円）、森村桂著「よきにはからえ」（二六〇円）、三遊亭圓生著／宇野信夫監修「真景累ケ淵　圓生人情噺（下）」（四八〇円）、入江相政著「行きゆきて」（三八〇円）、岩満重孝著「続百魚歳時記」（三六〇円）、太田愛人著「辺境の食卓」（三二〇円）

▽講談社文庫　シムノン著／長島良三訳「メグレ警視と生死不明の男」（二八〇円、一月中旬刊＝以下同じ）、広津和郎著「年月のあしおと」（五二〇円）、古川薫著「十三人の修羅」（三四〇円）、黒岩重吾著「男の市場（上・下）」（各三八〇円）、田辺聖子著「古川柳おちぼひろい」（三四〇円）、平岩弓枝著「おんなみち（上）」（四八〇円）、吉川英治著「三国志⑤⑥」（各五四〇円）、石坂洋次郎著「雨の中に消えて」（三四〇円）、エセル・ウォイニッチ著／佐野朝子訳「あぶ」（五二〇円）、湯川秀樹著「科学と人間のゆくえ」（五四〇円）、結城昌治著「真夜中の男」（三二〇円）、中薗英助著「ヨーロッパ無宿」（三四〇円）、戸板康二・吉田千秋著「写真・歌舞伎歳時記　秋冬」（四二〇円）、小松左京著「宇宙人のしゅくだい」（二四〇円）、浜田広介著「浜田広介童話集」（三二〇円）

▽新潮文庫　松本清張著「渡された場面」（二八〇円、一月二十八日刊＝以下同じ）、源氏鶏太著「湖畔の人」（三二〇円）、島尾敏雄著「死の棘」（四八〇円）、山本周五郎著「花杖記」（三六〇円）、黒岩達介著「青春をスキーに」（三二〇円）、浮谷東次郎著「がむしゃら1500㌔」（二二〇円）

1980年12月22日

神戸新聞

新冷戦の時代

中嶋嶺雄著

現代の国際政治をリアルに分析

八〇年代はいかなる世界なのか、これは現在、国際関係に関心を抱く者にとってとりわけ大きな課題となっている。いうまでもなく、双極から多極化へと大きく変貌（ほう）した戦後の国際政治のわく組みのなかで七〇年代末に生じた一連の国際的事件、ベトナムのカンボジア進攻、中国の対ベトナム「制裁」戦争、ソ連のアフガニスタン侵攻は新たな局面を現出させたし、またソ連の軍事力の増大とその世界的展開に対して米中日の〝同盟〟が指摘されるにまで至っているからである。

このような状況のもとで、第二次冷戦とか新しい冷戦という解釈が出されるようにもなり、これについては議論のあるところだが、著者は時代状況をつとに「生ぬるい戦争 Cool War」と規定しており、この立場から本書のタイトルが直截（ちょくせつ）に示すように「新冷戦の時代」として、国際政治の現段階をリアルに分析している。

著者は「本質的な冷戦構造の解体であるどころか…よりグローバルな冷戦への幕明けであったのではなかろうか」と自問し、まずはじめに戦後ほぼ十年ごとの節目における転換の様相を剔出（てきしゅつ）してのち、日本に密接な関係をもつ中国をはじめソ連、米国の対外姿勢、政策をそれぞれの問題のなかで相互関連させながら分析、批判し、「平和のための地政学」として国際関係研究のすすめと提言、さらに「日本の選択」として日本の対外政策上の提言を行っている。

本書は著者のこれまでの研究論文をベースとしながら、いわば一般向けに叙述されており、著者の考えを知るうえで適当であろう。

本書で扱われている問題は多岐にわたるが、評者の関心をもった論点を二、三挙げると、米国、日本でも一時盛んにいわれた対ソ政策上の〝チャイナ・カード〟というのは、いまや昔話であり、中国が〝ソ連カード〟を現在はもっているのであって、中ソ対立という「新しい神話」の陥穽（かんせい）に陥らぬよう警告し、中国の現在の状況からすれば中ソ和解の可能性をも見通しておかなければならないと指摘していること、また、米ソ両大国の錯誤は中国の虚と実を見極めていないことにあるという指摘などである。

本書は現代世界に関心を持つ者に、刺激を与え考えさせる本である。（TBSブリタニカ、B6判、二一五ページ・一〇〇〇円）

グンター・ブラム「テストパイロット」＝同書から

『高知新聞』

や　も一人では住めない感じの山　である。

三　中の一軒家であった。　さらに坂山は浜口の養子先・

で役立ったものと思われる。

いる。

ドイツとの政治関係の変化によって、ソ連におけるワーグナーの評価が二転、三転し、芸術家たちがこの政治劇に振り回される様子は、もはやブラックユーモアである。第七シンフォニーをはじめ、彼の作品の多くが、公式の解釈とは異なり、粛清された人々に対する鎮魂歌である、という証言は世界に衝撃を与えた。

ソ連当局は早速この「証言」を偽書と決めつけ、対抗上、これまでソ連で発表されたショスタコービッチの諸論文を「時代と自分自身について語るショスタコービッチ」と題して出版した。しかしソ連においては、公式的発言の方がより信頼性があるという保証は、どこにもない。（中央公論社、一、五〇〇円）

国際政治をリアルに

中嶋　嶺雄著

『新冷戦の時代』

八〇年代はいかなる世界なのか、これは現在、国際関係に関心を抱く者にとってとりわけ大きな課題となっている。いうまでもなく、双極から多極化へと大きく変貌（ぼう）した戦後の国際政治のわく組みのなかで、七〇年代末に生じた一連の国際的事件、ベトナムのカンボジア進攻、中国の対ベトナム「制裁」戦争、ソ連のアフガニスタン進攻は新たな局面を現出させたし、またソ連の軍事力の増大とその世界的展開に対して米中日の"同盟"が指摘されるにまで至っているからである。

このような状況のもとで、第二次冷戦とか新しい冷戦という解釈が出されるようにもなり、これについては議論のあるところだが、著者は時代状況をつとに「生ぬるい戦争（cool war）」を規定しており、この立場から本書のタイトルが直截（ちょくせつ）に示すように「新冷戦の時代」として、国際政治の現段階をリアルに分析している。

著者は「本質的な冷戦構造の解体であるどころか……よりグローバルな冷戦への幕明けであったのではなかろうか」と自問し、まずはじめに戦後ほぼ十年ごとの節目における転換の様相を剔出（てきしゅつ）してのち、日本に密接な関係をもつ中国をはじめソ連、米国の対外姿勢、政策をそれぞれの問題のなかで相互関連させながら分析、批判し、終わりに「平和のための地政学」として国際関係研究のすすめと提言、さらに「日本の選択」として日本の対外政策上の提言を行っている。

本書は著者のこれまでの研究論文をベースとしながら、いわば一般向けに平易に叙

にわたるが、評者の関心をもった論点を二、三挙げると、米国、日本でも一時盛んにいわれた対ソ政策上の"チャイナ・カード"というのは、いまや昔話であり、中国が"ソ連カード"を現在はもっているのであって、中ソ対立という「新しい神話」の陥穽（かんせい）に陥らぬよう警告し、中国の現在の状況からすれば中ソ和解の可能性をも見通しておかなければならないと指摘していること、また、米ソ両大国の錯誤は中国の虚と実を見極めていないことにあるという指摘などである。

本書は現代世界に関心を持つ者に、刺激を与え考えさせる本である。（ＴＢＳブリタニカ、一、８

〇円）

凝縮された豊かさ

永井　龍男著

『秋　その他』

作者のあとがきには〈自分では忘れていたが、八年振りの短編集だと云う。もともと視野の広い男ではないが、年を重ねるにしたがって、身辺の瑣事を材料にしたものが多く、さればと申して私小説としても中途半端だ〉とある。

ここには、第二回川端康成賞受賞作「秋」のほか九編が収められているのだが、作者の身辺に取材した作品ばかりである。主題は老年であり、病気であり、死であり、

へ出かけて、舞台上の二人の対話に耳を傾ける。そこではどんな男でも名月の下では〈所詮ちっぽけな人間同士に過ぎない〉という感慨が述べられている。鎌倉での月見や花火の夜の珍事件などを交えながら構成されている。

昭和十年以来、鎌倉に住んでいるという作者だけに、この町の話題が多い。「刈田の畦」では隣の町に住む六十年の旧知からの電話をきっかけに、テレビで見た山形の

という言葉を使ったが、その語り口は見事というほかはない。

若いころ病弱だったという永井龍男氏は七十を超えて〈この年齢になると、否応なく人間の一生を振り返る〉と書いている。この短編集には、作者の芸によって人事や自然が凝縮されているのだが、そこに「人生の秋」の豊かさが感じられるのである。（講談社、一、三〇〇円）

年貢体系に創見

網野　善彦著

『日本中世の民衆像―平民と職人』

最近、現代文明や近代的合理主義思考の行き詰まりのせいか、無視されがちだった中世時代の研究が盛んである。本書もそうした動向の一つであり、既成概念にとらわれることなく、中世社会を通じての基本的な被支配者の身分である「平民」と「職人」に視点を絞り、その生活の実態に光を当てた注目すべき仕事である。

平安末期から戦国時代に至る中世社会は、荘園公領制を基礎構造としているが、被支配者には自由民と不自由民があり、「平民」と「職人」は自由民に属する、と著者は言う。「平民」とはいわゆる百姓であり、年貢・公事などの賦役を負っているが、在来、封建的隷属民としてとらえられるだけで、その賦役の内実には具体的に触れられなかった。著者は、新発見の文書や多くの資料を駆使しつつ各地の年貢体系、その賦課形態を具体的に分析する。そして、年貢＝米であるという水田中心史観は支配者の作成した資料に足をすくわれており、実際は畠（はたけ）・山・林、あるいは塩浜・海・川などの多様な自然条件に応じた生産によって多様に成立していたことを指摘して、今後の研究の在り方を示唆する。

一方、「職人」は「平民」とは異なり、年貢・公事の負担義務を免除される特権を保証されている。その半面、天皇・院に仕え、摂関家、将軍家、寺院、神社などの建立に奉仕している技術者で、具体的には手工業者、医師、鍛冶（かじ）、刀磨（とうま）、鋳物師、銅細工師から芸能民や呪術（じゅじゅつ）師までを含む。彼らは定住せず全国各地を遍歴するが、鎌倉時代には唐人や朝鮮人も渡来し、各地で活動するに至る。

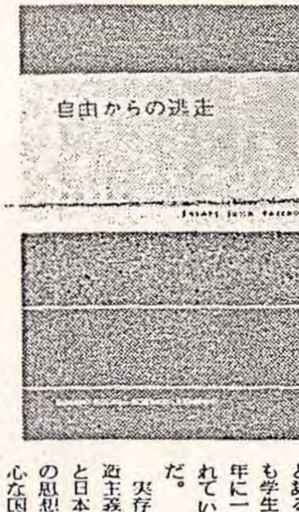
従来、ともすればスタティックな閉鎖社会としてとらえられがちだった中世とその中での庶民像を、開かれた視野から生き生きと浮き上がらせており、血の通った

この本

E・フロム著
日高六郎訳

『自由からの逃走』

自由の二面性を指摘



昨年三月、スイスで死去したエーリッヒ・フロムは日本になじみの深い思想家の一人である。彼の著作はほとんどが邦訳されているが、なかでも昭和二十六年に翻訳・出版された「自由からの逃走」はこれまで八十版を重ね、約三十万部売れている。

フロムはドイツ・フランクフルトに生まれ、哲学、社会学、心理学を学び、特にフロイトとマルクスの影響を受けて独創的な理論を展開したが、ナチスに追われアメリカに移住、一貫してヒューマニズムの立場から社会、文化問題を論じた。

「自由からの逃走」は、ファシズムが荒れ狂う一九四一年、第二次世界大戦のまっただなかで、序文に書かれているように「心理学者は必要な完全性を犠牲にしても、現代の危機を理解するうえに役立つようなことがらを、すぐさま提供しなければならない」との意図で出版された。

自由の問題を心理学的側面から分析するだけでなく、ルネサンス、宗教改革を経て近代に至る歴史のなかで、自由には人間を従来の束縛から解放する原理と、人間に孤独感と無力感とを与える否定的な側面とが絡み合っていることに着目、人間は「……からの自由」を求めるだけでなく、自由の重荷に耐えかねて「自由からの逃走」を願い、ナチズムのような全体主義を希求することもありうると指摘し、しかもその危険はデモクラシー社会にもうかがえるという内容だ。

本書が日本で翻訳されることになったいきさつは、辻村明東大教授が東大新聞研究所の学生時代、東京創元社の仕事を手伝っていて原書を読み感動、主任教授の日高六郎氏と同社の秋山孝男社長（当時編集長）に出版を勧めたのがきっかけだそうだ。

秋山さんは「当時は欧米の学問を紹介する出版が盛んでしたが、売れるかどうかわかりませんでした。本格的に売れ始めたのは十年ほどたってからです。日本も欧米並みの社会になり、フロムが指摘した自由の二面性が広く理解されるようになったからでしょう」と語る。現在でも学生を中心に年に一万部は売れているそうだ。

実存主義、構造主義、記号論と日本ほど外国の思想紹介に熱心な国はないといわれる。しかしそれだけに話題からすぐに消えていく著作も多い。本書が三十年も読まれ続けているのは、フロムの問題提起が、それだけ人間の根元に触れ、今日的意義があるからだろう。（東京創元社、一、二〇〇円）